

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』
平成20年度派遣報告書
——タイ・タマサート大学、タイ語、(H20.12.6-H21.3.11) ——

平成20年度入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程2回生
佐治 史

自身の研究テーマについて

私は、タイのラーチャブリー県のある観光地を調査地としている。この地域は、水上マーケット(ตลาดน้ำ)を呼び物として、国内外から多くの旅行者を集める場所である。本研究の目的は、この水上マーケットという場に焦点を当て、地域社会の人びとが観光という現象をどのように取り込み、方向付けていくのか、その文化的・社会的プロセスを文化人類学的な手法をもちいて明らかにすることにある。

タイでは、1970年代以降、国際観光が外貨収入の点で主要な産業の一つに成長してきた。1979年にタイ政府観光庁が設置されてからは、観光政策の内容も「文化」や「遺跡」を推進するものに変化してきている[須永2006:115-116]。水辺の生活環境や水上マーケットをめぐる状況にも変化がみられる。運河が排水、防衛に加えて、主要な交易・交通路であったバンコクでは、アユタヤ時代以来、河川、運河の川岸、特に合流点などの交通の要衝が市場の立地として選ばれてきた。商人は品物を積んだ船を漕いで市場に集まり、売り買いをしたのである。その運河が、今では埋め立てられ、道路に姿を変え、1960年代以降、オートバイや車による交通渋滞がバンコクの代名詞の一つになっているのである[末廣1993:2]。その過程で、バンコク内の水上マーケットも衰退していった。

しかし、その一方で、近年、バンコク近県の水上マーケットが、タイ社会の「伝統」や「文化」として再び注目され、観光地として新たに整備、建設される動きがみられる。調査対象地は、その先駆的な地域ともいえるのである。

こうしたタイの社会、経済状況の変化、国の政策などを背景に、水上マーケットが観光資源化される過程で、それを抱える地域社会の人々は、いかに観光を取り込み、方向付けてきたのだろうか。その日常実践を明らかにしていきたい。

研修言語の概要

狭義のタイ語は、タイ国の公用語であり、独自のタイ文字をもつ。文字(อักษร)は、子音文字(พยัญชนะ)と母音記号(สระ)と記号(เครื่องหมาย)および数字(ตัวเลข)から成る。5声調を有する声調言語であり、各音節に声調が加わって、初めて意味を持った「語」になる[富田1997:23]。サンスクリット・パーリ語、英語をはじめ、外来語からの借用が多いことも特徴の一つである。

語学研修の内容について

今回派遣された学生は私を含め二人であり、同一の授業を受講した。授業は今回の研修にあたり立ち上げられた特別授業で、タマサート大学教養学部タイ語学科の先生方が担当してくださった。全部で六人の先生方が、交代で授業を担当した。講義は、学生二人に対して先生一人のマンツーマン形式で、教

養学部棟の一室で行われた。期間は三ヶ月、頻度は週に4回、一コマ3時間（9：00～12：00）、週末は休みというのが基本的なパターンだった。研修期間の前半は外国人の学習者向けの教科書に沿って、文字、初級文法、発音を一通り学んだ。後半は読解と会話が中心となり、映画や短編の物語、新聞等を読み、それに対する感想をタイ語で述べるなどした。授業中の説明は、英語とタイ語を交えておこなわれた。毎回の授業は、前日の出来事の軽いおしゃべりから始まり、前日の授業内容の復習、その日のメインの内容へと続く。質問があれば、授業中か否かに関わらず、いつでも受け付けてくれた。タイ語の基本を一通りおさえた最終週の授業では、私の研究トピックに合わせて、市場の類型や市場で扱われている品物の名前、水辺の空間に関する用語など、パワーポイントを用いた授業がおこなわれた。その後、実際に調査候補地に足を運び、インタビューをおこなう機会も与えてもらった。授業全体に対して言えば、先生方の連携が非常に良く、有機的なつながりのある授業だった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

印象に残った体験としては、タイ語学科の学生30人ほどに混じって、2回にわたり研修旅行に参加したことが挙げられる。バンコク近県を訪れ、寺院や博物館などを見学する機会を得た。これを通して、同世代の親しい友人ができ、個人的にタイ語を教えてもらったり、遊びにも連れて行ってもらった。

また、大学とは別に、アパートの近隣の人たちとのつきあいも印象に残っている。アパートは、チャオプラヤ川をはさんで大学の対岸、バンコクノーイ (บางกอกน้อย) という地区にあり、小さな子どもからお年寄りまで幅広い年齢層が住む場所だった。行き帰りに交わす挨拶や、物売りの姿や声、近所での集まりへの参加など、暮らしてみても初めて触れることのできる世界があった。研修期間中で出会った多くの人は、日本から来た私たちのことを気にかけてくれ、困ったときにはいつも助けてくれた。

目標の達成度や反省について

今回の語学研修を終えて、文法の基礎を押さえることができ、文献を読むことも以前に比べて抵抗がなくなった。また、タイ人の友人ができたことで、タイ語を使う機会も格段に増えたことは確かである。ただ、会話の能力はインタビューをスムーズに行うというレベルにはまだ到達しておらず、語彙力のアップと共に今後の課題である。

今回の研修中には、授業外の時間を使い、調査候補地の選定も行う予定であったが、タイ語の学習に時間が取られたこと、また、臆せず遠出できるようになるのに予想以上に時間がかかり、ほとんど行なえなかった。いずれにしても、現時点ではタイ語の習得というには遠く、今後も学習を積み重ねていく必要がある。

末筆ながら、今回このような貴重な経験をさせていただいたこと、ご尽力下さったITP事務局の先生、職員の方々、タイ語学科の先生方、友人たちにあらためて感謝の意を示したい。本当にありがとうございました。



写真1 先生と一緒にワット・プラケーオへ



写真2 タイ語学科の先生方、プログラムへ一緒に参加した田中くんとタイ料理店での昼食



写真3 チャオプラヤー川から見た、タマサート大学（ター・プラチャン校舎）の様子

引用文献

- 須永和博. 2006. 『タイ北部山地カレン社会におけるエコツーリズムの民族誌的研究』
(立教大学大学院観光学研究科、博士論文)。
- 末廣昭. 1993. 『タイ 開発と民主主義』岩波新書。
- 富田竹二郎 (編). 1997. 『タイ日大辞典』日本タイクラブ。